

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 復讐律

## ——マタイ伝第5章38～42節——

1991年2月3日

小池辰雄

目には目を、デイベイン・リベンジ 復讐するは我にあり 神さまの審判 悪しき者に抵抗う  
な 無手勝流 何も要らん キリストの復讐は逆 青の洞門 自分自身に対する復讐

## 【マタイ5】

38 「目には目を、歯には歯を」と云えることあるを汝ら聞けり。39 されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

## ●目には目を

このキリストの御言のうち38節だけが復讐律です。

38 「目には目を、歯には歯を」と云えることあるを汝ら聞けり。

というのは、勿論、旧約聖書にあるから、キリストはこう言われた。出エジプト記21章22節、

「22 人もし相争いて妊める婦を撃ちその子を墮させんに、別に害なき時は必ず

その婦人の夫の要むる所にしがいて刑せられ、法官の定むる所を為すべし。

23 若し害ある時は生命にて生命を償い、24 目にて目を償い、歯にて歯を償い、

手にて手を償い、足にて足を償い、25 烙にて烙を償い、傷にて傷を償い、打

傷にて打傷を償うべし。」(出エ21・22～25)

これは「復讐律」と言われている。ラテン語で「レックス・タリオニス」と言う。復讐のおきて、さだめ。殺人したら、殺人者は殺されなければいかん、死刑、これが原則だという。日本の刑法は、どうも軽いようだ。人殺しにおいて、ただ終身刑だとか、懲役何年だとか。冗談じゃない。人殺しにもいろんな動機があるでしょう。いろんな場合があるから、私は一概には言いませんけれども、あきらかに殺意を持って、相手が別にそんなに悪くないのに殺してしまって、そんなのは明らかに死刑にしなくては。どうも、その点が弱いように思います。

人の歯をぶつ叩いて歯を折ったりしたら、その折ったやつは歯も折らなくてはいかんと。



それは、私は、原則として義ただしいと思います。しかし  
「本当に俺は悪かった」

と言って、償いのことをすれば、これはまた別の問題であるけれども。そうでなくて、自己主張しているようなやつは、やつぱり

「目には目を、歯には歯を」

というこの原則は、ちゃんと立てるべきものだと思います。キリストはそのことをすぐ律法として否定したとは、私は思いません。

### ● デイバイン・リベンジ

赤穂義士あこうのあの復讐は、当然と言ったら当然以上に素晴らしいことだ。自分たちは生命を賭して、主君の仇をうつ。吉良きらのあのけしからんやり方、それから、非常に一方的な裁きをした幕府それ自身がけしからんと、幕府の在り方に対する抗議でもあるわけです。あんなことで、すぐ「お家断絶」とくるんだからね、冗談じゃない。封建時代には本当に涙を流し、血を流して、お家断絶になってしまった人がたくさんいるわけだ。それから、「ニーベルンゲン・リード」という歌にもあるように、ドイツのゲルマン民族は復讐観念が強い。とうとう、みんな仆れてしまった。

藤井先生が、ダンテの『神曲』は「デイバイン・リベンジ (divine revenge 神聖なる復讐)」だと言った。その「神聖なる復讐」は、ダンテが「地獄篇」で描いているわけだ。もちろん、あれは詩ですから、人間はああいうようにただ分析し切れるものじゃない。けれども、こういう罪に対してはこういう仕打ちを受けるのは当然だ、というわけだ。

「神の正義、神の愛がこれをつくった」  
という。愛というのは、やつつけられた人達に対する愛です。

### ● 復讐するは我にあり

「復讐」という言葉は、私もあまり好きではありません。時々私は言うけれども、私の兄貴は北京で悪性腸チフスに罹って仆れるということになった。それはやり切れない話です。だから、私の生涯は弔い合戦であるというのは、ひとつはその事態に対する復讐でもある。何も相手に復讐しませんよ。何も復讐しないけれども——別に兄貴は恨んではいません、恨んではいませんけれども——彼はその十字架を耐えて忍んだ。それに対する、私の詩はそういう動機を持っている。そのまた余波を受けて、母は失明してしまった。

人生は、あなた方もいろいろドラマがあるでしょう。けれども、いろんなことを通して結局、神さまは最善をなしてください。

「愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。録して『主いい給う、

復讐するは我にあり我これを報いん』とあり。」(ロマ12・19)



これは申命記32章に出ている。

「国々の民よ汝らエホバの民のために歡喜をなせ。其はエホバその僕の血のために返報をなし、その敵に仇をかえし、その地とその民の汚穢をのぞきたまえばなり」(申命32・43)

「お前たちはやるな、私がやるから」ということです。

### ●神さまの審判

「復讐」という言葉はあまりいい言葉ではないけれども、実は本当は、「義しい審判をする」ことなんです。

「正しく裁くから忍べ、神さまの審判に任せろ」

と、その神さまの審判が、具体的に言うくと、復讐ということになるわけです。ですから、復讐とは本当は審判なんです。

「人間が自分で相手に仕返しをするな、私がやるから、私が裁くから」

と。地上で十字架を負った人は天界へ行くけれども、神さまの審判は、悪いやつは地獄へ落とす。魂の世界は、悪いことをしたやつ、良心が全然なくなっておかしくなったやつはもうしょうがない、どつちみち地獄行きだ。

「精神異常だから罪はない」

なんて、あれはちよつと、私は行き過ぎだと思う。精神異常なら何をしてもいいかと、冗談じゃない。

### ●悪しき者に抵抗うな

それがロマ書12章、申命記32章です。

「神さまに任せなさい」

と。そこで初めてキリストのその次の言葉が我々に臨んでくるわけです。マタイ伝5章39節、<sup>39</sup>されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。

この言葉で思い出すのは、イザヤ書50章4～9節。3番目の「エホバの僕の歌」です。

「<sup>5</sup>主エホバわが耳をひらき給えり。われは逆うことをせず、退くことをせざりき。<sup>6</sup>われを撻つものにわが背をまかせ、わが鬚をぬくものにわが頬をまかせ、恥と唾とをさくるために面をおおうことをせざりき。」(イザヤ50・5～6)

キリストがこの通りのことをされた。十字架を負っていく時に、さんざんけなされて罪人扱いにされた。そのように、相手のさせるのに任せる。打つやつが、実は頬を打った手の方が痛くなる。聖霊に満ちていると、打つやつの方が痛くなる。へたすると打てなくなる。



龍の口で日蓮を斬ろうとしたやつがぶっ倒れてしまったでしょ。日蓮は何も刀を抜いて相手をしたわけではない。斬るなら斬ってみると。ところが、斬ろうとするやつは仏の靈に撃たれて、もう斬れない。

これが土師記6章のギデオンの聖靈の世界です。聖靈の「灯火」と、讚美歌の「ラッパ」。讚美歌を歌って聖靈の光で戦う。「砕けたる壺」は棄身の態勢です。ギデオンの土師記6章というのは非常に大切なところですよ。やっぱりこのところがそれと通ずる。

「悪しきものに抵抗するな」と。

### ●無手勝流

塚原ト伝ほくでんのこういう逸話がある。

江州坂本辺から琵琶湖を矢橋の浦に渡る船中で六、七人の乗客の中に髭あくまで黒く、頬骨の突き出した見るからに屈強な武芸者が腕自慢に花を咲かせていた。あまりの傍若無人に腹を据えかねたト伝はついつい武芸者をからかってみた。武芸者は次第にいきりたつて、

「貴殿は広言を吐くが流儀は何流でござる」

「ハイ、無手勝流でござります」

「では試合をすれば無手にて勝つといわれるか。これは面白い。然らばいざ一戦。」

船頭おんじょうこの船止めよ」

と大音声に呼ばわつた。ト伝少しも騒がず、

「致し方がござらぬ。然し、船中の試合は他人に迷惑、あれなる辛崎の離れ島で、

人に負けない無手勝流をご覧に入れましょう」

船が離れ島に着くと武芸者は身も軽く、ひらりと岸に飛び降り、刀を抜いてト伝遅しと身構えた。この時ト伝は船頭から竹棹を奪って強く岸壁を蹴つて、逆に船を沖へと突き出した。武芸者は

「何をする、なぜ陸に上がらぬか」

と声高に叫んだが、ト伝は冷淡そのもの、

「これが無手勝流じゃ、くやしくば泳いでこい」

島にとり残された武芸者は地団太踏んで

「卑怯者！ その船返せ、戻せ」

と声をかぎりに叫んだが、ト伝は馬耳東風。

「これが我が流の極意じゃ。さらば、さらば」

同席の客人一同溜飲を下げて、どっと哄笑した。(日夏繁高『武芸小伝』)

塚原ト伝に、いい加減な侍が

「お前は剣を持っているくせに、なんだ」

と言って、果たし合いをしようとした。ト伝はもちろん負けはしない。けれども、そんな



馬鹿は相手にしない。

「それでは、あの島でやろう」

と。そして、舟が島の方に近づいたら、ト伝は

「お前は先に行け」

と言って、果たし合いをしかけた侍が先に島に降りたら、ト伝はその舟の棹を借りて、すと舟を島から遠ざけてしまった。

「これが私のお前との戦い方だ」

と。これが無手勝流という。相手を斬るだけの値打ちもないという。相手を救いながら勝っているわけです。これが本当の救いなんだ。「あの野郎は卑怯だ」なんて、向こうは思ってたでしょう。けれども、卑怯ではない。「お前を助けてやった」ということなんだ、逆に。

「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。」

と。これがそうなんです。

「左をも打たせろ。打つ方が、手が痛いくらいなもんだ」と。

### ●何も要らん

40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

まったく、キリストは無者です。何も要らんと。良寛さんもそういう方だね。盗人が来たら、「どうぞ」と、自分の寝ている布団まで持つていかせた。

「盗人の残しおきたる窓の月」

「窓にかかっていた、あのお月様は持つていかなかったね」

なんて。ということは、すべてのものは神のものである。日本の土地問題はとんでもない大間違いだ。これは神有だ。神さまのものだ。

とにかく、無の世界に、どん底の世界に自分をおくと、逆に、非常に気持が豊かになるし、底力が出てくる。どん底や無の世界に自分を置くことです。キリストは逆に力をくださる。「一里行け」と言ったら、二里歩いてやる。

### ●キリストの復讐は逆

即ちキリストの復讐は逆なんです。

「目には目を、歯には歯を」

ではなくて、全部、相手を生かしてしまう。その最後が、キリストの十字架なんです。我々の罪を全部引き受けて、そして我々には生命をくださった。旧約のイザヤ書にも出ている。

「お前の罪なんか皆忘れた」



という。「赦す」ばかりではなくて「忘れた」という。

「もはや思わざるべし」

という。一流の坊さんはかなりそういう境地を持っていました。だから私は、仏教の一流の坊さんは非常に尊敬します。素晴らしい。次元の違ったところに入ってしまったら、やせがまんしたつてダメです。やせがまんではない。そんなところとは次元が違うぞと。そういうところに我々の気持が行くと、必ず不思議なことが一人ひとりにおいて起きます。それが本当の福音です。

「悲しむ者は幸いなり」

「柔和なる者は幸いなり」

とか、みな反対のことばかりキリストは言っている。ところが、どっこい、本当の笑い、本当の喜びは、本当の涙を持つ人が持っている。マイナスを全部プラスに変えてしまう。変えるというのは、相対的に変えるのではない。絶対の境地でもって変えてしまう。福音は、そうなってくると、本当の自由になる。普通の人は、そういう自由なんてわかりっこない。

### ●青の洞門

あの有名な「青の洞門」の話には本当に驚いたね。私の詩の中にもちろん出てきます。菊池寛(1888～1948)が書いた『恩讐の彼方に』という小説です。あれも「恩讐」という。恩とうらみの彼方という。怨みを乗り越える。悪いことをしたやつが、自分の悪さを悔いて、人助けをする話です。

高田の藩士の子、福原市九郎は酒と博打と女に身をくずしたあげく親に勘当され、渡世人さながらの旅の果てに浅草の旗本屋敷、中川三郎兵衛の下僕として住みついたが、その主人の妻お里と道ならぬ仲となり、主人を殺して共に逐電してしまう。二人は強請や追剥など悪事を重ねて逃げ落ち、最後に木曾路、鳥居峠で茶屋の旦那とお上に変身する。

春秋十年、時は流れた。通りかかった高崎の呉服問屋蝦夷屋の若夫婦の後をつけ、殺してしまふ。市九郎は女の首を締めようとしたその瞬間、女の「南無阿弥陀仏！」と言う断末の声が耳に残り、自分の極悪非道を悔い、毒婦のお里を残して無我夢中で逃げ去る。

美濃の国の成願寺に辿りつき、明円上人に過ぎし四十路の人生の煩惱罪業深甚のありしままを告白し懺悔する。それから、朝に夕に勤行を重ね、上人の愛弟子となり、禅海という法名を賜り、衆生済度に身も魂も捧げ尽くさん悲願を抱く。

諸国行脚の旅路の末、九州、耶馬溪に到り着く。山国川の断崖絶壁の岨路から旅人が幾人も足を滑らせ落ちて死ぬという難所と聞き、禅海は、これは何とか助けてやらなくてはいかんと、この絶壁の大岩磐に穴を穿つ隧道開削の一大誓願を立てる。

時に、中川の一子実之助は父の仇討ちを断乎決意し、二十歳にして柳生流の剣の皆伝を許され、仇敵探しの旅にのぼる。光陰流れ、道は東西北南十年の旅路。最後に耶馬溪に到り、



禅海と巡り遭う。禅海は、

「あなたの来るのを実は待つていました。どうぞ、私を斬つてください。けれども、一つお願いがあります。この洞門を全部切り開くまで待つていただきたい。完成したら、必ず私を斬つてください」

と。あまりに相手が素晴らしい魂だものだから、その復讐に來た実之助は打たれて、「では、私も少し手伝いましょう」

ということになった。その2年後、掘削を始めてから12年後に工事が完成した。いよいよ時が来て、

「いざ禅海が首をはねて、御尊父の霊前に手向けさせ給え」

と言つて平伏すと、実之助は刀を抜いて、「エイ」と斬つたかと思つたら、禅海を斬つたのではない。自分のもとどり（髪の毛をまとめて結んだところ）を切つてしまった。

「恨みの妄執が消えました。仇討ちはもう止めて、私はあなたの弟子になります」

と。そういう有名な話です（小池辰雄著『霊界の星々』所載の「禅海」の詩参照）。

12年間でもつてとうとう洞門を開いてしまった。一遍、あそこの「青の洞門」へ行つて見てごらんさい。それは、じーつとして動けなくなるから。へえ、そういうことかと。

### ●自分自身に対する復讐

神に回帰すると、エライことになる。牢獄に居る人に私は実は平伏してお話をしたいくらいです。みんな同じことなんだ。悪い事をした人が悔い改めると、また逆に素晴らしいことになる。これが自分自身に対する復讐なんだ。マイナスがプラスになってしまう。

パウロがクリスチャンを迫害して、これを斬るのをよしとしていた。

「なんぞ我を迫害するか!」

とキリストにやられた。これはキリストの復讐、神の復讐なんだ。パウロは参つた。それから今度は、パウロは人殺しどころではない、人助けを始めた。これがパウロの伝道だ。

「我は罪びとの首かしら」

と、パウロが言うのはそういうことです。逆にもの凄いことになった。キリストの敵で、大反対のパウロが逆にキリストの本当の味方になった。これがキリストの復讐なんです。キリストの復讐は相手を助けて、別な人間にしてしまった。十字架でもつて我々を、罪びとを救い、生命を与えて、罪を問わない。

「お前の罪は全部引き受けた。お前は過去・現在・未来も、問題ないぞ」

というのが十字架なんだから。ありがたくてしょうがない。だから、私は、

「キリストの前に圧倒されて生きる」

と言つてるでしょ。圧倒される。この他に如何なる福音ありや、というわけです。

